

世代間交流が高齢者のジェネラティビティと 精神的健康に与える影響

和田希美^{*1}・西村昌記^{*2}

Effect of Intergenerational Interaction on Generativity and Mental Health in Seniors

Nozomi WADA^{*1} and Masanori NISHIMURA^{*2}

〈抄録〉

本研究では、世代間交流が高齢者のジェネラティビティと精神的健康に与える影響を探ることを目的とした。調査は2016年8～9月、相模原市老人クラブ連合会会員500名を対象に、郵送法により実施した。有効回収数は351、有効回収率は70.2%であった。回答者の性別構成は男性57.3%、女性42.7%、年齢は60～91歳、平均76.4歳であった。分析に用いた主要な変数は、世代間交流（次世代との交流頻度、子育て支援行動、次世代育成行動）、ジェネラティビティ、精神的健康であった。分析にあたって、①世代間交流はジェネラティビティと精神的健康を向上させる、②ジェネラティビティは精神的健康を向上させる、③ジェネラティビティは世代間交流と精神的健康の関係を媒介するという3つの仮説を設定した。重回帰分析による最終分析の結果、子育て支援行動と次世代育成行動はジェネラティビティを介して精神的健康を向上させる、次世代との交流頻度も部分的にジェネラティビティを介して精神的健康を向上させることが明らかになった。これらのことから、高齢期の精神的健康にとって世代間交流とジェネラティビティが重要であることが示唆された。

Key words：世代間交流、ジェネラティビティ、精神的健康、媒介効果、高齢者

I. 目 的

1. 問題の所在

高齢社会白書によれば、日本の65歳以上の高齢者人口は、過去最高の3,392万人となり、高齢化率も26.7%と過去最高となった（内閣府、2016a）。また、高齢者人口のうち、65～74歳人口は1,752万人で総人口に占める割合は13.8%、75歳以上人口は1,641万人で、総人口に占める割合は12.9%である。今後も高齢化は進み、2025年には団塊の世代が75歳になり、後期高齢者が急増することが予測される。急速な少子高齢化が進行している日本において、生産年齢人口を増やす努力も必要ではあるが、現実的に考えれば、今後も増加する高齢者の持つ資源の活用が労働力、知識・技術、文化の継承など多くの面で重

要となる。

一方、少子化についての現状をみると、2014年の出生数は100万3,539人とどまり、合計特殊出生率は1.42と、9年ぶりに前年を下回った（内閣府、2016b）。急速な高齢化の要因には長期に及ぶ少子化の影響が大きい、その背景として子育て環境の不備など、政策的な問題を指摘することができる。かつてのように祖父母として多くの高齢者が子育てに関与した時代に戻ることは現実的ではないかもしれないが、日本がかかえる最重要課題ともいえる少子化対策においても、高齢者の力を活用することを考えなくてはいけないだろう。

本研究では、世界でも比類のない超高齢社会において、高齢者が何らかの役割を見出すことが、社会にとっても高齢者自身にとっても意義深く、高齢化と少子化という2つの課題の対応策ともなるという観点から、「世代間

*1 東海大学健康科学研究科保健福祉学専攻（修了生）（former Tokai University Graduate school of Health Sciences）

*2 東海大学健康科学部社会福祉学科（Tokai University School of Health Sciences）

交流」と「ジェネラティビティ」に焦点をあてる。「世代間交流」とは高齢者と次世代（子どもや子育て世代など）とのかかわりであり、「ジェネラティビティ」とは、後述するように、「次世代の育成や世代的継承性への認識・関心」を意味する。小澤（2012）のレビューによれば、ジェネラティビティを高めることは、人生満足度や精神的健康などの適応的な心理特性と正の相関を持つとされており、高齢期の QOL を向上させるための不可欠な要素と考えられる。また、現代の日本の最重要課題である少子化問題を解決する手段として、子育て支援の一環としても高齢者が次世代の育成に寄与することが有用であると考えられる。

世代間交流とジェネラティビティの関連について、田淵ほか（2013）の整理を参照すると、ジェネラティビティが次世代とのかかわり行動への動機づけになるという理論をもとにした研究と次世代とのかかわり行動がジェネラティビティの発達に影響を及ぼすという研究という2つの流れがあるとされている。田淵ほか（2013）は、ジェネラティビティが次世代とのかかわり行動の因果関係を明らかにするために、2時点パネル調査を実施している。その結果、世代間交流行動の機会をつくることでジェネラティビティの発達を促進しうる可能性と、ジェネラティビティの発達が世代間交流行動の効果として位置づけられるという可能性という双方向の関係が示唆されたとしている。

本研究では、次世代へのかかわり（日常的交流、世話や知識・技術の伝達など）を「世代間交流」という概念で捉え、それがジェネラティビティ（次世代の育成や世代的継承性への認識・関心）を介して精神的健康に影響を与えるというモデルを検証することを目的とする。以下、本章では先行研究をもとに、世代間交流、ジェネラティビティ、本研究の位置づけと分析枠組みについて整理する。

2. 世代間交流

草野（2004）によれば、この分野における第一人者であるサリー・ニューマンは、世代間交流とは「異世代の人々が相互に協力しあって働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」と定義している。国際世代間交流協会によると、「世代間交流プログラムは、社会に存在する様々な資源や知識・知恵を高齢世代と若年世代の人々で交換し合い、個々人や社会の役に立つものにしていくための意図的・継続的な仕掛けである」とされている（柿沼、2010）。日本では、草野（2004）が、「子ども、

青年、中・高年世代の者がお互いに自分たちの持っている能力や技術を出し合って、自分自身の向上と、自分の周りの人々や社会に役立つような健全な地域づくりを実践する活動で、一人一人が活躍の主役になることである」と定義している。このように、世代間で相互に作用があることに加え、高齢者が知識や経験を若い世代に伝えるという意味合いがあることがわかる。

日本において、高齢者と子どもの世代間交流が意図的に行われるようになったのは、核家族化が進展し始めた1960年代頃からといわれている（金森、2012）。この頃は、日本の伝統や文化を次世代に伝承すること、高齢者の社会的孤立を防ぐことなどを目的とした世代間交流が地方にも都市にも生まれた（草野、2004）。1970年代までは、世代間交流といえばもっぱら家族内のことを指していた一方で、今日の世代間交流に連なるような活動がわずかではあるが記録されるようになる。しかし、「世代間交流」というような名称が使用されるには至らなかった。1980年頃から、高度経済成長のひずみの是正が課題となり生活の質（QOL）を重視し、社会的経済格差をはじめ、性差、年齢差をも超えた「共生」が求められるようになった。1984年に開始した「高齢者の生きがい促進事業」の1つとして「世代間交流事業」という名称が各地で用いられるようになると、世代間交流は、家族外のそれとして認知されるようになった。文献レビューによれば、高齢者と子どもの世代間交流に関する研究が盛んになったのは1999年以降のことである（金森、2012）。また、日本世代間交流学会が設立されたのは2010年のことであり、世代間交流の重要性が世間に十分認知され、学問的にも成熟するのは今後のことと考えられる。

3. ジェネラティビティ

ジェネラティビティとは、Erikson が生み出した概念であり、「漸成的発達図式（epigenetic chart）」における適応課題のひとつとして提示されたものである。このモデルでは、心理社会的発達を8つの段階によって示している。ジェネラティビティは、その心理社会的発達の第7段階目、中年期の心理社会的適応を達成するための同調要素として設定されている。ジェネラティビティは単独で成立するものではなく、自分にしか関心が向かず、人間関係が貧困になり、他者に積極的に関与しようとしなくなる「停滞（Stagnation）」という対となる要素があり、この要素のバランスによって、これまで大切にしてきた人や物や観念の面倒をみることへの、より広範な関与である「世話（Care）」という「徳（Virtue）」が得

られる。言葉自体は、Erikson の造語であり、生み出すという意味の“generate”と世代という意味の“generation”と掛け合わせたもので、子孫を生み出すこと（procreativity）や生産性（productivity）、創造性（creativity）といった意味合いを包含するものである（Erikson & Erikson, 1997）。

小澤（2012）は、ジェネラティビティの心理社会的適応のメカニズムの視点から、「次世代を生み育てることを通じて、次世代に希望の感覚を根づかせ、心理適応的な社会システムの再編成を促し、それと同時に、自分の死後にも残るような生き方や仕事に身を投じようとする欲求を満たし、自己停滞を乗り越える、という複雑な図式を想定している」と述べている。さらに、次世代を育み世界を維持する役割の遂行と、無意識下での自己保存の欲求の充足という心理的適応プロセスとが連動する図式であるとまとめている。

田淵（2010）の整理によれば、Erikson は、当初、ジェネラティビティを異性の相手との親密な出会いを鍵として、そこから「生み出すこと」全般について意味するとし、そのため「親であること」を第一義的定義とし重視した。その後、異世代間の「相互性（mutuality）」の視点を導入し、次世代に対して「教えること」や、組織の中で知識や技能を次世代に伝達することが行為として含まれるようになり、ジェネラティビティの定義も拡大した。さらに、次の発達課題である「統合」との関連から「祖父母の世代性」（Erikson et al., 1986）という言葉に象徴されるように高齢期の課題としても論じられるようになった。1990年代になると McAdams & Aubin（1992）が、Erikson の文献を詳細に検討し、ジェネラティビティを、①「文化的要請（cultural demand）」、②「内的欲求（inner desire）」、③「関心（concern）」、④「信念（belief）」、⑤「関与（commitment）」、⑥「行動（action）」、⑦「物語（narration）」という7つの要素からなる複合概念として整理をしている。

近年では、長寿化や晩婚化等の社会的背景の変化に伴い、ジェネラティビティが必ずしも中年期といった年代や、親役割に限られた概念ではなくなったという報告があると深瀬・岡本（2010）はレビューしており、Chang（2009）も高齢期においても重要な発達課題となっていることを指摘している。本研究では、高齢期のジェネラティビティを「次世代の育成や世代的継承性への認識・関心」と定義し、世代間交流および精神的健康との関連を検討する。

4. 本研究の位置づけと分析枠組み

内外の世代間交流プログラムの介入効果に関する研究をレビューした糸井ら（2012）によれば、高齢者と子どもの相互理解、高齢者の QOL 向上や抑うつへの低減効果、および健康度自己評価の向上など、ヘルスケアへの有益性が報告されている。一方、日本においては、世代間交流が高齢者に及ぼす影響についての研究は少なく、交流者の変容や効果評価の基準となる概念や尺度の検討は今後の課題であるとされている（大場ほか、2013）。

山田（2011）によれば、高齢者は、児童と高齢者の交流体験によって、自立心や生きがい、人とのつながり、楽しさ、会話、食事、外出、健康、元気、表情などに効果があつたと自己評価している。日下（2008）は、高齢者の世代間交流の動機には、「世代間継承意識」「自己充足意識」「地域貢献意識」「世代理解意識」の4つの次元が存在し、孫との同居など多世代との交流によって高まることが示され、日常的な他世代との関わりによって、相互の理解を深めたいという意識がもたれている。また高齢者は、世代間交流は、他世代との交流が多い人ほど次世代にとって有益と評価し、交流を通して他世代への貢献よりむしろ自らに還元されるものがあると感じているとしている。藤原ほか（2006）によると、世代間交流を通じた知的ボランティア活動により健常高齢者の主観的健康感や社会的サポート・ネットワークが増進し、地域共生意識および体力の一部に効果が見られたとしている。都市部多世代交流型デイプログラムを用いて効果測定を行った亀井ほかの研究（2010）では、高齢者の孤立を防ぎ、心の健康によい効果があることが示唆されている。田淵（2009）は、ジェネラティビティの中核には若い世代への直接的な世話や貢献といった「親性」に対する関心があり、高齢世代が若年世代の支援を行うという形の世代間交流では、若い世代への関心が高まることが最も顕著に表れる効果であり、世話の側面におけるジェネラティビティの向上が推測できるとしている。

ジェネラティビティについての実証研究が盛んに行われるようになったのは、1990年代に入ってからである。それは、ジェネラティビティを実際に測定するための尺度として「Loyola Generativity Scale（LGS）」が作成されたことによる（McAdams & Aubin, 1992）。今日の欧米におけるジェネラティビティの研究は、多くがこのLGSを用いてジェネラティビティを測定しており、LGSの開発後、向社会的行動における研究や養育態度研究などにおいても新たにジェネラティビティの概念が用いられるようになり、研究は大きく飛躍した。ジェネラティビティという重層的な概念は、いくつかの要素に分割さ

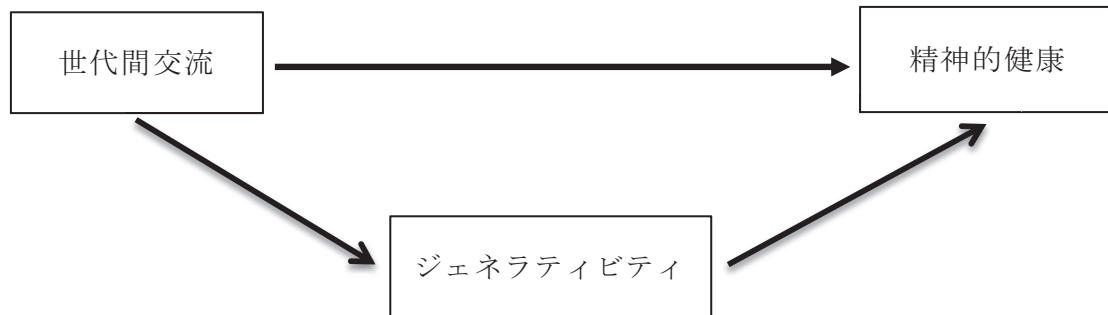


図1 分析モデル

れ、それらの要素を測定する尺度が開発されたことにより、ジェネラティビティと心理社会的適応に関する諸変数との関連も明らかにされてきた。小澤（2012）のレビューによれば、適応的な心理特性（外向性、開放性、調和性、人生満足度、幸福感、自尊心、目標性、人生の一貫性、精神的健康、ウェルビーイングなど）とは正の相関が認められ、非適応的な心理特性（情緒不安定性、抑うつ性など）とは負の相関が認められている。

日本では、丸島の研究（2000；2005；2007）がその嚆矢といえる。丸島（2000）は、中年期の自己概念や人格発達の側面からジェネラティビティに注目し、中年期におけるジェネラティビティが後の高齢期につながるものとして重要な人格発達であることを報告している。丸島（2005）は、McAdams & Aubin（1992）によるジェネラティビティ概念モデルと LGS を基に、日本語版世代性関心尺度の作成を試みている。探索的因子分析を行った結果、「世話」（3 項目）、「世代継承性」（4 項目）、「創造性」（5 項目）の 3 因子構造が明らかとなった。しかし、信頼性・妥当性の検討を行ったところ一部妥当性が認められないといった問題が残された。その後、丸島・有光（2007）は、成人発達論における先行研究を参考に日本の文化的背景を念頭に置いて項目を追加し、20代から80代までの成人を対象に調査、探索的因子分析を行った。その結果、「世話」（7 項目）、「世代継承性」（5 項目）、「創造性」（8 項目）の3因子構造が明らかになり、改訂版世代性関心尺度を作成した。併存的妥当性および収束的妥当性が確認されている。この尺度は、LGS を基とはしているが、半数以上はオリジナルなものとなっており、特に「創造性」の項目は数も多く、強調された尺度内容となっている。堀毛（2008）は、改訂版世代性関心尺度を用いて日本人中高年者の世代性を測定し、中年期よりジェネラティビティが高くなることを報告している。田渕ほか（2012a）は、改訂版世代性関心尺度をもとに、LGS の概念に沿った 5 側面を含み、かつ信頼

性・妥当性が検証された短縮版尺度を作成している。

本研究では、これらの先行研究の成果を踏まえ、①世代間交流はジェネラティビティと精神的健康を向上させる、②ジェネラティビティは精神的健康を向上させる、③ジェネラティビティは世代間交流と精神的健康の関係を媒介するという 3 つの仮説を設定した。分析モデルは、図 1 の通りである。

Ⅱ. 方 法

1. 調査の概要

調査は、2016年8月～9月、相模原市老人クラブ連合会会員500名を対象に、郵送法により実施した。有効回収数は351、有効回収率は70.2%であった。回答者の性別構成は男性57.3%、女性42.7%、年齢は60～91歳、平均76.4歳であった。

2. 対象者の選定方法

相模原市老人クラブ連合会に所属する会員を対象とした。標本の抽出方法は、割当法を用いた。地区老人クラブの会員数で割当数を決め、老人クラブ連合会事務局を通じて、地区会長に対象者の選定を依頼した。選定方法は任意とした。ただし、病気等で活動していない会員は除外するよう依頼した。

調査票の送付に際しては、相模原市老人クラブ連合会および事務局である相模原市地域包括ケア推進課に協力を依頼した。また、老人クラブ連合会理事会および老人クラブ連合会会長に対し、研究概要および個人情報保護のための措置について説明し、承諾書を得た。

3. 調査の内容

1) 基本属性

調査対象者の基本属性として、性別、年齢、現地居住年数、学歴、同居家族、くらし向き、健康状態について

たずねた。

2) 世代間交流

①次世代との交流頻度

小林ほか(2016)の「子ども・子育て世代との交流頻度」と同様のスコア化を用いた。まず、「子どもや10代の若者」「20～40代くらいの人」「50～60代くらいの人」「70代かそれより高齢の人」のそれぞれについての交流頻度を「全くない」(0点)から「よくある」(3点)の4件法でたずねた。次いで、「子どもや10代の若者」「20～40代くらいの人」との交流頻度の合計を2で割った平均値を「次世代との交流頻度」とした。

②子育て支援行動

小林ほか(2016)の地域の子育て支援行動尺度を用いた。この尺度は0～24点の範囲をとり、得点が高いほど支援行動をよくしていることを意味している。信頼性係数は.860であった。

③次世代育成行動

田淵ほか(2012b)の世代性行動尺度のうち世代間交流に関連する9項目を用い、「全くしなかった」(0点)から「よくした」(3点)の4件法でたずねた。この尺度は0～27点の範囲をとり、得点が高いほど次世代育成行動をよくしていることを意味している。信頼性係数は.854であった。

3) ジェネラティビティ

田淵ほか(2012a)の短縮版 Generativity 尺度を用いた。この尺度は、「自分の経験や知識を人に伝えるようにしている」「私が死んでも、人は私のことを覚えてくれるだろう」「私が人のためにしてきたことは、後世にも残ると思う」「無理のない範囲で、募金をしたい」「何かに向かって前進していると感じる」の5項目からなる。0～20点の範囲をとり、得点が高いほど次世代の育成や世代的継承性への意識・関心が強いことを意味している。信頼性係数は.787であった。

4) 精神的健康

老人用うつスケール(GDS; Geriatric Depression Scale)の短縮版(Sheikh and Yesavage, 1986; Niino et al., 1991)を用いた。この尺度は0～15点の範囲をとり、得点が高いほど抑うつ傾向が強いことを意味している。信頼性係数は.765であった。

4. 分析方法

1) 基本属性別と世代間交流との関連

次世代との交流頻度、子育て支援行動、次世代育成行動の各項目について基本属性(性、年齢、健康度、くらし向き)との関連を検討した。

2) 世代間交流がジェネラティビティに及ぼす影響

世代間交流を独立変数、基本属性を統制変数、ジェネラティビティを従属変数とする重回帰分析を行った。

3) 世代間交流が精神的健康に及ぼす影響

世代間交流を独立変数、基本属性を統制変数、GDSを従属変数とする重回帰分析を行った。

4) ジェネラティビティの媒介効果

3)の分析に、ジェネラティビティを独立変数に追加投入することにより、世代間交流の影響をジェネラティビティが媒介していることを検証した。

5. 倫理的配慮

調査実施上の倫理的配慮として、対象者には無記名によるアンケートであり、データは統計的に処理をするため個人を特定することはできないこと、調査への協力は強制ではなく、協力できない場合でも不利益を生じることはない旨等、文書により提示した。なお、本研究は東海大学健康科学部倫理委員会の承認を受け、実施された。

III. 結 果

1. 基本属性別と世代間交流との関連

性、年齢、健康度、くらし向きと世代間交流(「次世代との交流頻度」「子育て支援行動」「次世代育成行動」)の関連を明らかにするためにt検定を行った。結果は、表1に示すとおりであった。

次世代との交流頻度と次世代育成行動では健康度による有意な差が認められ、健康な人の方が健康でない人よりも次世代との交流や育成行動の頻度が高いことが示された。性、年齢、くらし向きによる差は認められなかった。

子育て支援行動では、性別による有意な差が認められ、女性の方が男性よりも支援行動を多く行っていることが示された。年齢、健康度、くらし向きによる差は認められなかった。

2. 世代間交流がジェネラティビティに及ぼす影響

世代間交流がジェネラティビティに及ぼす影響を検証するために重回帰分析を行った。なお、世代間交流を測

表1 基本属性別と世代間交流との関連

	<i>N</i>	次世代との 交流頻度	子育て支援行動	次世代育成行動
性別				
男性	201	1.51	10.88	13.51
女性	150	1.59	12.21 *	14.42
年齢				
75歳未満	130	1.62	11.71	13.19
75歳以上	219	1.50	11.31	14.31
健康度				
健康である	304	1.58	11.59	14.20
健康でない	46	1.28 *	10.50	11.84 **
くらし向き				
ゆとりがある	113	1.58	11.38	14.12
普通・ゆとりがない	237	1.53	11.47	13.78

* $p < .05$ ** $p < .01$

表2 ジェネラティビティを従属変数とする重回帰分析の結果

	I	II	III
性別（→女性）	.025	-.027	-.025
年齢	.053	.058	-.079
健康度（→健康）	-.002	.023	-.032
くらし向き（→ゆとりがある）	.169**	.185**	.160**
次世代との交流頻度	.397**		
子育て支援行動		.493**	
次世代育成行動			.648**
重相関係数（ <i>R</i> ）	.436**	.523**	.658**

* $p < .05$ ** $p < .01$

表3 GDSを従属変数とする重回帰分析の結果

	I	II	III
性別（→女性）	-.019	.012	.011
年齢	-.006	.021	.076
健康度（→健康）	-.305**	-.310**	-.294**
くらし向き（→ゆとりがある）	-.172**	-.183**	-.175**
次世代との交流頻度	-.224**		
子育て支援行動		-.172**	
次世代育成行動			-.245**
重相関係数（ <i>R</i> ）	.446**	.415**	.450**

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 ジェネラティビティの媒介効果

	I'	II'	III'
性別（→女性）	-.019	.001	.002
年齢	.006	.035	.059
健康度（→健康）	-.314**	-.312**	-.302**
くらし向き（→ゆとりがある）	-.137**	-.140**	-.144**
次世代との交流頻度	-.128*	-.048	-.110
子育て支援行動			
次世代育成行動			-.110
ジェネラティビティ	-.226**	-.249**	-.209**
重相関係数（ <i>R</i> ）	.493**	.469**	.477**

* $p < .05$ ** $p < .01$

定するための3つの変数である「次世代との交流頻度」、「子育て支援行動」、「次世代育成行動」の間に高い相関が認められたことから（.512～.644）、多重共線性を避けるため、3変数を別々に投入した（Ⅰ～Ⅲ）。

分析の結果、「次世代との交流頻度」、「子育て支援行動」、「次世代育成行動」と、「くらし向き」に有意な正の影響が認められた（表2）。すなわち、くらし向きにゆとりがあり、世代間交流をしている人の方が、ジェネラティビティが高いことが示された。また、性別、年齢、健康度は、ジェネラティビティに影響を及ぼさないことが示された。

3. 世代間交流が精神的健康に及ぼす影響

世代間交流が精神的健康に及ぼす影響について検証するために、GDSを従属変数とする重回帰分析を行った。結果は、表3に示すとおりであった。

「次世代との交流頻度」、「子育て支援行動」、「次世代育成行動」と、「健康度」、「くらし向き」に有意な負の影響が認められた。すなわち、くらし向きにゆとりがあり、健康であり、世代間交流をしている人の方が、抑うつ傾向が低い（すなわち、精神的健康が高い）ことが示された。また、性別、年齢は、精神的健康に影響を及ぼさないことが示された。

4. 世代間交流と精神的健康をつなぐもの—ジェネラティビティの媒介効果

ジェネラティビティの媒介効果を検証するために、表3に示した分析Ⅰ～Ⅲに独立変数としてジェネラティビティを追加投入した分析を行った。その結果、GDSに対する「子育て支援行動」と「次世代育成行動」の有意な影響が消失した。これは、「子育て支援行動」と「次世代育成行動」が直接、精神的健康に影響を及ぼしてい

るのではなく、ジェネラティビティを介して効果をもつことを意味している。また、「次世代との交流頻度」についても標準偏回帰係数の値が大きく低下していることから、部分的な媒介効果が示された。

すなわち、世代間交流によってジェネラティビティが高まり、その結果として精神的健康も高まることが示された。

IV. 考 察

1. 基本属性と世代間交流との関連

次世代との交流頻度と次世代育成行動では健康度による有意な差が認められ、健康な人の方が健康でない人よりも交流頻度が高いことが示された。一方、子育て支援行動では、性別による有意な差が認められ、男性よりも女性の方が支援行動を多く行っていることが示された。これは子育てに直接関わってこなかった男性の高齢者が多いという背景や、女性の方が子育てに関する経験や知識が多く、近所の付き合いでも子育て中の人に会う機会が男性より多い傾向にあるため、男性より行動的であるということと考えられる。

2. 世代間交流がジェネラティビティに及ぼす影響

世代間交流がジェネラティビティに及ぼす影響を検証したところ、「次世代との交流頻度」、「子育て支援行動」、「次世代育成行動」のいずれにも、有意な正の影響が認められた。すなわち、世代間交流をすることによって、ジェネラティビティが高まることが示唆された。

若い世代との交流頻度がジェネラティビティに関連を持つということから、交流自体に世代継承的な意味合いが含まれていることが推測される。また、多くの高齢者は子育ての経験や知識を持っている。この経験や知識を

伝えることで、次世代の育成に関わる意欲や関心が高まってくると考えられる。しかし、少子化の影響もあり、自分の孫の世話をしている高齢者はわずかであろう。前述したように、子育て世代の負担を軽減することは少子化対策としても有効と考えられるため、支援の機会を設けることも必要かもしれない。

さらに、次世代育成行動を多く経験しているということは、前述したように“伝承する”、“継承する”といった意味を含んだ行動を多くしているということになる。この経験によって、世代的継承性への意欲や関心を高めていると考えられ、小澤（2012）のいう次世代を育み世界を維持する役割の遂行と無意識下での自己保存の欲求の充足という心理的適応プロセスとが連動する図式、つまり停滞感を乗り越えるための試みにつながると推察される。

世代間交流とジェネラティビティの両方を扱っている論文は数少ない。そのなかで、田淵（2009）は、研究で抽出された上位カテゴリー「子どもへの関心」の内容はMcAdams & Aubin（1992）が再定義化したうちの「他者への世話と責任」の側面に類似するものであり、直接的な子どもへの貢献を、子どもからの直接的な反応に関心がとどまることなく、高齢になるに従ってより将来的な子どもの発達にまで関心が向けられるようになると考えられると述べている。別の先行研究（田淵、2012b）では、高齢者が自らの経験や知恵を生かし、若者に利他性を発揮する「語り」行動は、若者がそれに対してポジティブな反応を示すことが高齢者自身のジェネラティビティの発達につながり、より相手に対する利他性の高い「語り」行動へとつながることを示すことができたと報告している。また、日下（2008）は、個人が心理社会的な発達課題を達成するには、異なるライフサイクルの段階にある世代間のいきいきとした関わり合いが高齢者に限らず、どの世代とっても大きな役割を果たす。人と人との関係を中心とした新しい生き方が、超老年期における信頼感や自発性の葛藤の解決を促し、個人の適応を導くとまとめており、本研究での結果とも合致している。

3. 世代間交流が精神的健康に及ぼす影響

世代間交流が精神的健康に及ぼす影響についての分析では、「次世代との交流頻度」、「子育て支援行動」、「次世代育成行動」のいずれもが精神的健康に良好な影響を及ぼしていることが示唆された。

日下（2008）が指摘しているように、地域や社会に貢献したい、地域のつながりを深めたいという「地域貢献意識」が背景にあり、いろいろな人達と関わることで、

自身の存在価値や自尊感情が高まり精神的健康への好影響につながる結果をもたらしたと考えられる。

世代間交流の効果には、高齢者のQOL向上や抑うつなどの低減効果および健康度自己評価の向上などの有益性が報告されている。ヘンケン（2004）は、子どもや若者から高齢者への効果として、将来を担う世代と自分のスキル、知識、経験を分かち合い、コミュニティとのつながりを保ち続ける機会を持つことにより、人生の満足度、社会的孤立、全般的な健康に関してよい効果をもたらすことがあるとしている。内田ほか（2015）は孫から受ける次世代への継承の期待感が、高齢者の精神的健康度の向上に寄与していると推察している。また、血縁関係になくても、技術・技能の伝承や継承といった場面においては、師弟関係や地域や生活場面における教授者と被教授者の関係が存在し、祖父母と孫の関係と近似した機能が存在するのではないかと述べている。つまり、世代間交流によって若い世代から次世代への継承の期待感が得られることが精神的健康の向上につながっているのかもしれない。

4. 世代間交流と精神的健康をつなぐもの—ジェネラティビティの媒介効果

世代間交流をすることが精神的健康を良好にするというメカニズムを明らかにするために、ジェネラティビティの媒介効果を検証した。分析の結果、「子育て支援行動」と「次世代育成行動」が直接、精神的健康に影響を及ぼしているのではなく、ジェネラティビティの向上を介して効果をもつことが明らかになった。また、「次世代との交流頻度」についても部分的な媒介効果が示された。以上のようにジェネラティビティの媒介効果を統計的に明らかにしたことは、新たな知見といえるだろう。

本研究では、先行研究の整理からジェネラティビティを「次世代の育成や世代的継承性への認識・関心」と定義した上で、その測定には田淵ほか（2012a）の短縮版Generativity尺度を用いた。この尺度は、永く記憶に残る貢献・遺産、次世代のための知識や技能の伝達、次世代の世話と責任、コミュニティや隣人への貢献、創造性の5つの側面を含んでいる。このような認識・関心を高めることは、高齢者がその生を全うし、充実した晩年期を迎えるためにも重要なことと考えられる。次世代との交流を通して、そのような認識・関心を高めることができ、その結果、良好な精神的健康を得られることができるとすれば、その機会を豊富に提供することが、高齢者にとっても、高齢社会を生きる次世代にとっても有用なことであると考えられる。

5. 結 論

先行研究を概観すると、世代間交流が精神的健康により影響があることが示唆されているが、かならずしもそのメカニズムが明確ではない。そこで本研究では、ジェネラティビティという概念に着目し、それを世代間交流と精神的健康をつなぐ「媒介変数」と仮定した。ジェネラティビティは内容的にも世代間交流と関連が深いと考えられるが、両者の関連を明確に検証した研究も少ない。また、先行研究では「世代間交流」に関する適切な測定法も示されていない。そこで本研究では、「世代間交流」を次世代へのかかわり（日常的交流、世話や知識・技術の伝達など）と広く捉え、それがジェネラティビティ（次世代の育成や世代的継承性への認識・関心）を介して精神的健康に影響を与えるというモデルを検証することを目的とした。世代間交流を行うことによって、ジェネラティビティが向上し、その結果に伴って精神的健康も向上することが示され、モデルの検証をすることができた。

本研究では世代間交流の範囲を広くとり、次世代との交流、子育て支援、次世代育成の3側面から捉えた。どの側面もジェネラティビティの向上に寄与していることが示唆されたが、このことは、ジェネラティビティを視野に入れた次世代育成行動だけではなく、多くの高齢者に経験がある子育て支援や単なる交流だけでも、ジェネラティビティや精神的健康の向上に寄与することを意味している。世代間交流プログラムを開発・実践するだけではなく、近隣やコミュニティ、高齢者自身や他世代の人びとの意識が変わるだけでも、そのような成果が得られるのではないかと。

また、ジェネラティビティを視野に入れて「高齢者が次世代の育成に寄与する」方策を検討することは、少子化と高齢化という2つの社会的課題に対応するために重要な指針となる。高齢者は若い世代との交流を望んでおり、今後は若い世代との交流機会を作っていくことが必要である。イベントやプログラムのような機会を作るだけでなく、挨拶や声をかけ合えるような地域の関係づくりをすることにより、子育て中の親子などの他の世代とのコミュニケーションをとれる環境をつくることも交流のきっかけとなる。

本研究の限界として、調査対象が一地域の老人クラブ会員であったことがあげられる。老人クラブ会員の人は、非会員と比べ地域とのつながりが強く、地域活動にも熱心なため、結果に偏りが生じた可能性がある。今後の研究課題として、一般の高齢者を対象に、本研究で立てた仮説を再度、検証する必要があると考えられる。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、お忙しい中アンケートにご協力をいただきました神奈川県相模原市老人クラブ連合会会員の皆さま、調査の橋渡し等さまざまな便宜を図ってくださった相模原市地域包括ケア推進課に心より感謝申し上げます。また、多くの方々のご協力により本研究が完成しましたことを深く感謝申し上げます。

引用文献

- Chang, S. T. (2009) Generativity in Later Life: Perceived Respect from Younger Generations as a Determinant of Goal Disengagement and Psychological Well-being. *The Journals of Gerontology, Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 64B (1) : 45-54.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. (1997) *The Life Cycle Completed*. New York : W. W. Norton & Company (=2001, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房).
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., Kivnick, H. Q. (1986) *Vital Involvement in Old Age*. New York : W. W. Norton & Company (=1990, 朝長正徳, 朝長梨枝子訳『老年期：生き生きしたかかわりあい』みすず書房).
- 深瀬裕子, 岡本祐子 (2010) 「老年期における心理社会的課題の特質：Eriksonによる精神分析的個体発達分化の図式第VIII段階の再検討」発達心理学研究21 (3) : 266-277.
- 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他 (2006) 「都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果」日本公衆衛生雑誌53 (9) : 702-714.
- ヘンケン, N (2004) 「プログラムによる世代間交流の促進」草野篤子, 秋山博介編『インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流（現代のエスプリ444）』至文堂59-65.
- 堀毛一也 (2008) 「成人期のサスティナブルな信念の個人差に関する研究（1）」日本社会心理学会第49回大会発表論文集202-203.
- 糸井和佳, 亀井智子, 田高悦子, 他 (2012) 「地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果：文献レビュー」日本地域看護学会誌 15 (1) : 33-44.
- 柿沼幸雄 (2010) 「世代間交流の学際的性格」草野篤子, 柿沼幸雄, 金田利子, 他編『世代間交流学の創造』あけび書房36-48.
- 金森由華 (2012) 「高齢者と子どもの世代間交流：交流内容を中心に」愛知淑徳大学論集, 福祉貢献学部篇 2 : 69-77.
- 小林江里香, 深谷太郎, 原田謙, 他 (2016) 「中高年者を対象とした地域の子育て支援行動尺度の開発」日本公衆衛生

- 生雑誌63 (3) : 101-112.
- 日下葉穂子 (2008) 「超高齢時代における世代間交流の意義：関西学研都市高齢者の世代間交流に関する調査から」 同志社女子大学学術研究年報 59 : 69-78.
- 草野篤子 (2004) 「インタージェネレーションの歴史」 草野篤子, 秋山博介編『インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流 (現代のエスプリ444)』至文堂33-41.
- 草野篤子 (2010) 「世代間交流とソーシャル・キャピタルを考える：スウェーデン、アメリカ、日本を例として」 草野篤子, 柿沼幸雄, 金田利子, ほか編『世代間交流学の創造』あけび書房36-48.
- 丸島令子 (2000) 「中年期の「生殖性 (Generativity)」の発達と自己概念との関連性について」 教育心理学研究48 (1) : 52-62.
- 丸島令子 (2005) 「世代性尺度の作成：世代性の関心と行動モデルの測定」 心理臨床学研究23 (4) : 422-433.
- 丸島令子, 有光興記 (2007) 「世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討」 心理学研究78 (3) : 303-309.
- McAdams, D. P., Aubin, E. S. (1992) A Theory of Generativity and Its Assessment through Self-Report, Behavioral Acts, and Narrative Themes in Autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology* 62 (6) : 1003-1015.
- 内閣府 (2016a) 「平成28年度版高齢社会白書」 日経出版.
- 内閣府 (2016b) 「平成28年版少子化対策白書」 日経出版.
- ニューマン, S (2004) 「アメリカのインタージェネレーション」 草野篤子, 秋山博介編『インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流 (現代のエスプリ444)』至文堂116-123.
- Niino, N., Imaizumi, T., Kawakami, N. (1991) A Japanese Translation of the Geriatric Depression Scale. *Clinical Gerontologist*, 10: 85-87.
- 大場宏美, 藤原佳典, 村山陽, 他 (2013) 「世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generative 尺度作成の試み」 日本世代間交流学会誌3 (1) : 59-65.
- 小澤義雄 (2012) 「老年期の Generativity 研究の課題：その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて」 老年社会科学 34 (1) : 46-56.
- Sheikh, J. I., Yesavage, J. A. (1982) Geriatric Depression Scale (GDS) ; Recent Evidence and Development of a Shorter Version. *Clinical Gerontologist*, 5 (1/2) : 165-172.
- 田渕恵 (2009) 「中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差：世代間交流とジェネラティビティの視点から」 生老病死の行動科学14 : 3-12.
- 田渕恵 (2010) 「世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷」 生老病死の行動科学15 : 13-20.
- 田渕恵, 中川威, 権藤恭之, 他 (2012a) 「高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」 厚生指標59 (3) : 1-7.
- 田渕恵, 中川威, 石岡良子, 他 (2012b) 「高齢者の世代性および世代性行動と心理的 Well-being の関係：若年者からのフィードバックに着目した検討」 日本世代間交流学会誌2 (1) : 19-24.
- 田渕恵, 三浦麻子, 中川威, 他 (2013) 「高齢者における世代性 (Generativity) と次世代との関わり行動の因果関係：性差に着目した検討」 日本世代間交流学会誌3 (1) : 35-40.
- 内田勇人, 藤賀彩花, 江口善章, 他 (2015) 「孫との関係が祖父母の精神的健康度に及ぼす影響」 日本世代間交流学会誌5 (1) : 29-36.
- 山田和廣 (2011) 「児童と高齢者の世代間交流効果：児童と高齢者のコミュニティフレンド事業の場合」 日本世代間交流学会誌1 (1) : 89-97.

Abstract

The purpose of the present study was to examine the associations among intergenerational interaction, generativity, and mental health in seniors. Subjects were members of the Sagamihara senior club. Surveys were carried out in 2016 and completed for 351 persons. The response rate was 70.2%. Of the total, 57.3% of the respondents were male. Their ages ranged from 60 to 91 years (mean age: 76.4). The main variables that were used for analysis were frequency of contact with the younger generation, the child-rearing support scale, the generative acts score, the generativity score, and the geriatric depression scale. Three hypotheses were examined: (1) intergenerational interaction had a significant positive effect on generativity and mental health; (2) generativity had a significant positive effect on mental health; and (3) the association between intergenerational interaction and mental health was mediated by generativity. The result of the multiple regression analysis revealed that generativity acted as a full mediator in the association between child-rearing support/generative acts and mental health. Moreover, generativity partially mediated the association between frequency of contact with the younger generation and mental health. It was suggested that intergenerational interaction and generativity were important for mental health in later life.

Key words: intergenerational interaction, generativity, mental health, mediated effect, senior